

私に影響を与えた一冊

cscoppe

本というものを読む際に考慮しなければならないことが二つある。それは場所とスケジュールである。私は考えている。勉強前に官能小説を読めば、いらぬ興奮と冷めやまぬ悶々とした抑えきれぬ欲望を机の上に持ち出さなければならなくなるし、はたまたスカイダイビング中に本を持ち出せば、風圧によりさつき読み始めたばかりの推理小説のページがあっという間に巻末までめくられ、江戸川乱歩も驚愕のスピードで事件解決という事態も想像できなくはない。

要するに本にはそれ相応の最適な環境というものが各々存在するわけだ。とりわけ本を読むスペースとして、マニアックなファンを抱える場所に便所というものがある。

この便所の利便性は個室であり、誰からの阻害も受けないうえ、口うるさい母親からの勉強をしなさいという通達すらも「ごめんあそばせ、いまお手洗い中ですの」というシレっとした反応でかわせるという点にもある。しかしこの一見万能に見える便所というものにも欠点がある。それは長時間の便座滞在による下半身への負担がおおきいということだ。長時間同じ姿勢でいることにより発症するエコノミー症候群もあるように最悪便所で命を落としかねない危険性もある。

いま述べた二つの長所と短所を踏まえ、私は長年の便所内における読書から一冊の本にたどりつくこととなる。その本こそが村上春樹と糸井重里共著の「夢で会いましょう」だ。村上春樹といえば現在最もノーベル賞に近い日本人といわれている方で、糸井重里といえばジブリ映画の大半のキャッチコピーを考えた人物である。

この二人が適当にピックアップした単語に関するショートショートの世界感を五十音順に約50話掲載してあるのだが、これまたその一つ一つの物語が独特の世界感を持っており短いものなら30秒、長いものでも5分程度で読み終わられるため朝が忙しい企業戦士向けでもある。

さらに便所読書というものは自分の下半身への負担、お尻の温かい便座による低温やけどなどと闘いながら読まなければならないためある程度の時間で区切りをつけ、便所の外で休憩を取らなければならない、もしこれが「夢で会いましょう」ではなくドストエフスキーの「罪と罰」だったならばラスコーリニコフのセリフのどこに区切りをつければいいのか悩んでいるうちに尻は焼けただれ、同一姿勢により血管に血栓ができエコノミー症候群で死亡してしまうこと必須である。しかし、一話一話が独立しているこの本ならば問題はない。

このような観点から私は「夢で会いましょう」を推したいのだが、決してこの作品は便所でしか楽しめないというわけではなくソファに寝転びながらでも読める。むしろそちらのほうが楽しいかもしれない。ただ私に便所での読書のあり方というものに影響を与えてくれたこの本のよさというものを、今回のエッセイの題材である「私に影響を与えた一冊」という題で皆様にお送りしたい。